

どこへ行けばいいのだろうか

奈良 敏行

(笈の定有)

二月末(二〇二五)に刊行される『本屋のパンセ』には索引がついている。頻出語の第一位は「ランボオ」だった。本屋の時代ランボオを持ち出す機会は絶えてなかった。本屋から路上へ足を踏み入れたとき、せきを切って飛び出したのがランボオだった。本屋以前のピュシス(自然)に還れば、そこには象徴秩序(言葉)が待ち受けていた。それがランボオだ。

ランボオは象徴秩序から現実へ向かおうとした人間だ。ランボオの現実はどこにあったのだろうか。文化の中心パリに絶望した二十歳の青年はどこへ行けばよかったのだろうか。そこには、ランボオとポール・ニザンの「アデン」が蠱惑的に存在した。

《彼らは突如思いついたのだ。旅をしよう、と。早く一人前になりたいという焦りが、熱病にでもかかったみたいに全身にまわり、だからだと月日が流れていくうちに、抵抗

しがたい遠心力が、パリという地球の臍から遠く離れたところへヨーロッパでもっとも身軽な人々を引き寄せた。》(『アデン・アラビア』)

ランボオは何度も何度もヨーロッパ脱出を試みながら失敗し、それでもアデンへ到達する。資金がないので傭兵に応募し脱走したりするがうまくはいかない。ニザンはわりとすんなりアデンに到達する。豊かきの違いだ。

ランボオの二十歳。

《他人が二十歳の年をとり俺も二十歳の年をとり……》

ニザンの二十歳。

《僕は二十歳だった。それが人生でもっとも美しいときだなんて誰にも言わせない。》

ここに五十年を隔てた冒険の始まりがある。早熟の青年たちは外部を必要としたのだ。

なぜアデンか。東インド会社が商船の基地としたのがカリカット、カンベイ、ホルムズ、そして紅海入口のアデンだった。イギリス東インド会社が嚆矢で一六〇一年、フランス東インド会社の終焉が一七六九年。ランボオのアデンは一八八〇年、ニザンは一九三一年、アデンは榮えてはいたが、誰でも成り上がれる時代は終わっていたのだ。ニザンは言う。

《アデンでは僕はパリにいるとき以上にやることがな

い。』

ランボオは更に外部を求めてアデン湾を渡りハラリをめぐすが熱病にかかってアデンへ撤退するだけだ。

何もいいことはなかった。ニザンは「旅行とは、取り返しのつかない消失の連続なのだ。」と嘆く。しかし、外部を求めていたのは時代精神なのだ。ランボオは当然死んだと思われ、ヴェルレーヌの『呪われた詩人たち』が神格化を進めていく。デカダン、サンボリストの王座に据えらるるのだ。『デカダン誌』編集者はこの神話を披瀝する。

『噂では、彼は永遠に地平の涯に姿を消し、自然の生活に回帰し、蛮族の王になつたという事であつた。』(『象徴派の系譜』)

ニザンはアデンに一年しか滞在しなかつたのに、外部を求める若者たちの希望となつた。

「本屋・往来」から「笈の定有・路上」と舞台を回したわたしは、どこへ行けばいいのだろう。

『旅をするとは、出かけた先で何かを言ったかと思うと、また何かを言うために戻ってくることにすぎない。行つたきり帰つてこないか、旅先に小屋でも建てて住むのであれば話は別ですけどね。だから、私はとても旅をする気になれない。……「ノマドとは、動かない人たちのことである。旅立つことを拒むからこそ、彼らはノマドになるのだ』』

(『記号と事件』)

ドウルーズ一九八八年の言葉だ。

ノマドは出かけない。動くのはその象徴秩序なのだ。「笈の定有」とはノマドの象徴秩序だ。象徴秩序は言葉であり書物だ。路上と「笈」との出入りが「物語」を生成する。物語とはここで、「見立て」のことだ。

わたしはどこへ行けばいいのだろう。「笈の定有」はノマドだから、アデンへ出かけることは間違つてもありえない。

025.01.06

(参考)

奈良敏行・三砂慶明編 『本屋のパンセ』 作品社 2025 予定

ポール・ニザン ルオー 『アデン・アラビア 名誉の戦場』 河

出世界文学全集 2008

ランボオ 小林秀雄訳 『地獄の季節』 岩波文庫 1972

竹内健 『ランボオの沈黙』 紀伊國屋新書 1970

ジル・ドウルーズ 『記号と事件』 河出文庫 2021

羽田正 『東インド会社とアジアの海』 講談社学術文庫 2019